



## 死者の日 (ヨハネ 6:37-40)

すべての人が終わりの日に復活する

11月に入りました。教会の暦では死者の月です。今生きている人と死者の違いを今週考えてみたいと思います。そして、すべての人が終わりの日に復活することについて考えることにしましょう。

最近よくキジハタが釣れているのですが、前回出かけたときはいちばん釣れるだろうと思っていた時間帯にまったく釣れませんでした。どうしたことだと思っていたのですが、それらしい原因が見つかりました。イルカが四頭、悠々と泳いでいるのです。

わたしのボートから20mくらいしか離れていないところを、しばらく泳ぎ回っていました。おそらくイルカを警戒して、すべての魚がじっとしていたのではないのでしょうか。人間は何と鈍感なのでしょう。イルカが呼吸をするために水面に出てきて初めてその存在を意識したのです。水中で魚を追い回している間、魚はたまったものではないはずです。

というわけで釣り始めた場所をあきらめ、1kmくらい場所を移動しました。ここなら大丈夫と思ったのに、場所を変えてしばらくしたらまたイルカがやってきました。しつこいにもほどがあります。ただ、その後1kgくらいのキジハタを立て続けに釣ったので、イルカに追われたのがかえって幸運を呼び寄せることになり、悪い気はしませんでした。

今日の典礼に移りましょう。今生きている人と死者の違いをまず考えてみたいと思います。手足があるかないか、わたしの考えるところそういう点は大した違いではありません。むしろ、どれくらい神を意識しているかという違いが大きいとわたしは思っています。

つまり、生きている人はそれほど神を意識しなくても生きていくことができますが、死者は常に神を意識しています。この違いは大きいのです。実際、この世にあって神を忘れて生きている人、神がいることすら認めずに生きている人もいますが、死者は死後にすぐ第一の審判である私審判を受け、天国か、煉獄か、あるいは地獄のいずれかに置かれ、神の存在を常に感じているのです。

わたしたちは、神の存在を避けることもあるでしょうし、神から遠く離れて逃げることもあるでしょう。いつも神を意識して生きることは、心から願っている人であってもそう簡単なことではありません。

しかし、死者の置かれている状態は、言わば神と向き合っている状態です。死者は神の存在を片時も忘れません。神を避けることも、神から逃げることも不可能なのです。天国に迎えられている人は、神の愛を常に感じていますし、煉獄にいる人は神の深い憐れみを感じています。地獄にいる人が神をどのように感じるのかは分かりませんが、もしかしたら神の裁きは正しくまことであると感じているのかもしれない。

地上の人間も、徐々に神を意識するようになります。年齢を重ねながら、また人生のいろんな場面で病気を経験するたびに、あるいは罪のゆるしを受け、償いを果たすうちに、神を避けては生きられないことを

徐々に意識するのです。

すると、今日の福音朗読のみことばが誰のためのものであるかが分かってきます。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」(6・39) 復活の希望へと導く人を一人も失いたくないと願っているイエスの思いは、ほかでもないわたしに向けられているものなのです。

死者も、最後の審判と言われる公審判がまだ控えています。この公審判によって、煉獄にいる人々がすべて天国に迎えられます。天国に入るまでの間、煉獄にいる人々は神の憐れみを一瞬も忘れずに過ごしています。なぜなら彼らは疲れることも眠ることもないので、片時も神の愛の内に招かれる日を忘れないのです。

地上にいる人が片時も神の存在を忘れずに生きることは困難ですが、ミサに参加しているこの時間は、ほかのどの時間よりも神と向き合っていることを意識できる時間です。罪を抱えて神と向き合っているかもしれないかもしれません。または生活上の悩みや不安を抱えて神と向き合わなければならないかもしれないかもしれません。それでも、何とかここに集うことで、神を避けることなく、逃げることもしないひと時を作っているのです。

これはかけがえのない時間です。「たしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(6・40) 「子を見て信じる」という態度は、何よりもミサの中で果たすことができる姿なのです。

ミサに集い、神と向き合うなら、より深く神の存在を意識している身近な死者に思いを向け、わたしたちも神を間近に感じる時を過ごせませす。死者の日のミサを通して、神を近くに感じる生き方を遠ざけない、むしろ喜んで受け取る勇気を願いましょう。